

バードリサーチ ニュース

2008年10月号 Vol.5 No.10



Garrulus glandarius
Photo by Uchida Hiroshi

参加型調査

コサギは郊外の大きな河川で減っている？ アンケート調査 中間報告

平野 敏明

コサギは、日本で最も普通に見られるシラサギと言われていいます。しかし、その一方で、関東地方や北日本では、近年コサギが減少したという声を聞きます。そこで、私は、昨年冬の冬に20年前に調査した栃木県内の河川で再びコサギの生息状況を調査してみました(バードリサーチニュース2008年4月号)。すると、農村地帯を流れる多くの河川からコサギの姿が消えている一方で、ビル街を流れる中規模な河川では、まだその姿をみることができました。さらに、住宅地の小さな河川にもコサギが生息していたのです。果たして、コサギは本当に減少しているのでしょうか。それとも、コサギの減少は、特定のごく狭い地域で起きているだけで、全体的にはさほど深刻な状況になっていないのでしょうか。

この問題を明らかにするために、バードリサーチでは、2008年4月からアンケートによるコサギの生息状況調査を始めました。調査自体はまだ継続中ですが、ここでは、9月20日までに回答があった47件の情報をもとに、今までに分かった結果を簡単に紹介したいと思います。

1. 地域ごとのコサギの生息状況の変化

まず、今回の調査で、回答のあったほとんどの地域には、コサギがまだ生息していることがわかりました。しかし、その一方で、やはりコサギの生息数が減少したという意見は全体の31%を占めました。関東地方以外の情報数は極めて少なくその実状を反映していない可能性もありますが、関東地方から近畿地方や四国、九州など広い範囲から減少しているとの情報をいただきました(図1)。また、変化がないという意見も全体の34%ありました。同じ県内でも減少したという回答と変化がないという回答の両方が報告されています。

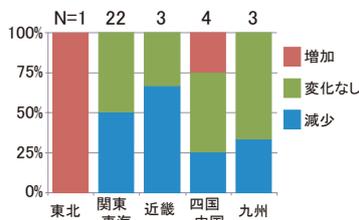


図1. 地域別の生息状況の変化。

2. 市街地と郊外の比較

そこで、減少した場所と変化がない場所で環境的に何か違いがあるかどうかを、まず、調査地の周囲の環境区分の

違いから検討してみました。アンケートでは複数の回答がありましたが、環境区分を便宜的に大きく市街地とそれ以外(郊外)にわけて、集計してみました(図2)。すると、市街地よりも郊外で減少した調査地の割合が多いことがわかりました。

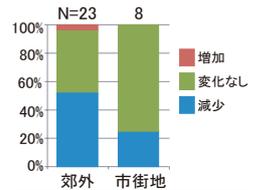


図2. 周辺の環境区分と生息状況の変化。

3. 河川規模でみてみると

次に、観察地の多かった河川での回答をもとに、河川の規模とコサギの生息状況の変化の有無をまとめてみました(図3)。その結果、10m以下の小規模な河川では変化なしが減少より多かったのに対し、51~100mの河川では両者が逆転し、101m以上の大規模な河川になるとすべての調査地で減少していました。

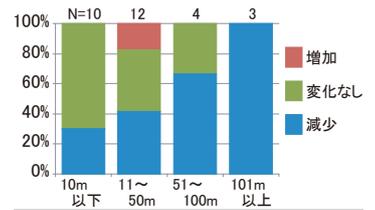


図3. 河川の規模と生息状況の変化。

4. 減少した時期とアンケートのお願い

これらから、コサギの減少は、どうも農村や樹林地などの郊外のしかも大きな河川でより顕著に起きているようです。この結果は、私が昨年の冬に栃木県の河川で行なった調査結果とも一致していました。では、コサギの減少はいつごろから起きているのでしょうか。1990年代以前という意見もありましたが、最も多かったのは、2000年代前半で、次に多いのが2000年代後半でした。コサギの減少は、やはり近年になって生じてきたことが示唆されました。今回、生息状況に変化がないと回答があった地域でも、今後新たに減少が起きるかもしれません。

しかし、残念なことに、今までに情報が寄せられた地域は、関東地方を除くとあまり多くありません。また、市街地や大規模河川の情報も少なく、コサギの現況を明らかにするためにさらには多くの地域から情報が必要です。コサギのアンケート調査は、下記のホームページで継続して行なっています(画面下にアンケートの入力画面へのボタンがあります)。一人でも多くの方の情報をお待ちしています。ご協力をお願いいたします。末尾ながら、回答をいただいた39名の方々にお礼申し上げます。

■コサギの生息状況調査のホームページ
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kosagi/

学会情報

日本鳥学会2008年度大会参加報告

9月13日から15日にかけて立教大学で開催された鳥学会に参加してきました。ポスター発表と口頭発表はそれぞれ80前後でしたが、今年は口頭発表の会場が2つから3つに増えて、そのかわり3～5の発表ごとに総合討論の時間が設けられました。質疑の時間が十分取れるようになって、発表の時間が後ろにずれることがなく、会場を歩き来しても講演の途中からしか見られないということがなくて良かったです。ただ、会場数が増えた分、聞くことができない講演が増えてしまうというデメリットもありました。どちらが良いかは、自分が聞きたい発表がうまく聞けたかどうかで、人によって評価が分かれるのかもしれませんが。



写真1. カワウの自由集会の風景。

● カワウの発表全部で10題

今回はカワウの発表が多かったのが目にとまりました。口頭発表5題、ポスター発表5題で、全部で10題。それに加えてカワウの自由集会です。その中から2つ紹介します。

**富士川水系中流域における魚類相の変化
～コイ科魚類の減少とカワウ生息数の増加に注目して～**
○坪井潤一・岡崎巧・芦沢晃彦・桐生透・大浜秀規

口頭発表では、坪井さんたちのカワウの胃内容と投網で捕獲した魚の魚種組成を比較した発表が面白かったです。投網調査から推定された川にいる魚の量は、アユが一番多かったのですが、カワウの胃内容を調べてみると、オイカワが一番多く、アユはその次でした。川にいる量が多い割に胃内容からあまり出現しなかったアユよりも、少ない割に胃内容から多く出現したオイカワとウグイの方がカワウに好まれていたと言えるのではないかと発表でした。アユは、逃げ足が速いので、川にたくさんいる割に、カワウは捕食できないのではないかと発表者は考えているようでした。もし、この結果がほかの地域でも当てはまるなら、放流直後のアユの動きが悪い時を重点的に守れば、食害をだいぶ減らせるのではないのでしょうか？

有害捕獲がカワウの行動にもたらす影響
○富永光・藤岡正博

それから、ポスター発表では、カワウに近づける距離を調べるというものがありませんでした。富永さんたちは、アユの放流後から解禁までの間に、栃木、群馬、神奈川、山梨の4県で調査者がカワウに近づける距離を調べました。すると、山梨県で顕著に4月と5月の調査の間で差がみられ、5月では近づける距離が遠くなりました。これは、山梨県で2回の調査の間にカワウの追い払いが行われたことが影響したのではないかと、のことです。また、銃器による捕獲を多くしている栃木県で、そうではない神奈川県よりも近づける距離が遠いなどの結果が示されていました。銃器

捕獲や追い払いなどの漁協の対策や川幅などの環境要因を数値化して比較してみることができれば、綺麗な相関がありそうなので、今後の分析に期待したいと思います。

● 機器を使った行動や鳥類相の研究

フィールドワークに必要なものと言えば、双眼鏡と野帳、あとは体力と根性と時間。でも、それだけでは、解明できないことが多いのも事実です。バードリサーチでは、衛星追跡や船舶レーダー、録音機器などを使った調査や研究を行っています。それで、目にとまるようになったせいなのかもしれませんが、以前に比べると、行動や鳥類相の研究でも何がしかの機器を使ったものが増えたように思います。今回の学会で僕が興味を持った発表を2つ紹介したいと思います。

やんばる地域の森林性鳥類による地上利用パターンと外来種侵入に対する脆弱性について

○小高信彦・久高将和・嵩原健二・佐藤大樹

これまで、鳥類相の調査でセンサーによる自動撮影カメラが使われることはほとんどありませんでした。これを使って森林性のあまり鳴かない鳥のモニタリングができないか検討した関伸一さんの発表は見逃してしまったのですが、同じ方法を用いた小高さんたちの発表は面白かったです。やんばるの森でヤンバルクイナの生息数をカメラを用いて調査したところ、マングースの撮影頻度の高い地域でヤンバルクイナの撮影頻度が低いという結果が得られていました。



写真2. 自動撮影カメラで撮影されたヤンバルクイナ。

鳥類相の調査では、従来のラインセンサスやバンディングに加えて、録音や録画など複数の手法を組み合わせると、ラインセンサスでは記録されにくい鳥のモニタリングが可能になってきています。こうした調査手法が確立することで、僕らが気付かないうちに手の施しようがないほど減ってしまう種を減らすことができるのではないのでしょうか。

鳥類位置特定装置(GPSトランスポンダ)の開発について
○時田賢一・矢澤正人・玉置晴朗・樋口広芳

行動では、衛星追跡やデータロガーを用いた研究でこれまでもいろんなことがわかってきました。ですが、機器の重さや大きさのほかにも、費用がかかったり、機器を回収しなければいけないという制約があります。時田さんたちが開発した「GPSトランスポンダ」は、鳥を再捕獲することなく、数10km離れた基地局からGPSデータを取り出せるというものです。衛星追跡に比べるとひとケタ安い価格設定になるようで、追跡する個体数を増やすことができますし、予算の少ない人でも利用できるなど、今後が楽しみな技術だなあと感じました。【高木 憲太郎】

活動報告

鳥渡り、レーダーまわる秋

植田 陸之

渡りの季節です。バードリサーチのもっとも高価な調査機器、船舶レーダーの活躍する季節になりました。船舶レーダーは本来、船の障害物を探るためのものですが、障害物と同様に鳥も映るので、そのエコーを追うことで鳥の飛行状況を知ることができます。

1. 白樺峠でのサシバとハチクマの調査

最初の調査は、長野県白樺峠。9月17日、サシバやハチクマの渡りがレーダーにどう映るかの予備調査に行きました。レーダー一式はワンボックスカー1台が満載になるほどの量があるのですが、そのレーダーを背負って山道を登るのはまさに苦行。しかし、その甲斐あって、峠からのレーダーの視界は良好でした。通常、レーダーで鳥の面的な動きを追おうとすると、どうしても地面からの反射で生じるノイズにより鳥はきれいに映らないのですが、斜面のおかげで反射の少ない山の上ではきれいに鳥が映ります。最初は、ツバメなどの小鳥たちまで映ってしまうので、それに邪魔されてタカの動きが良く分からなかったのですが、慣れてしまえば、タカの動きが手に取るようになってきました。どこを滑翔して移動し、どこで上昇気流をつかむのか…。今回は予備的な調査なので1日しかデータをとりませんでした。データを蓄積していけば、風等の状況に応じて経路や上昇気流をつかむ位置をどのように

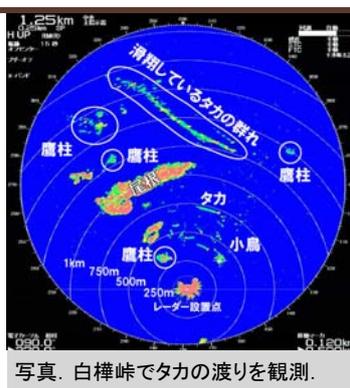


写真. 白樺峠でタカの渡りを観測。

決めているのかなど明らかにできるのでは、と新たな研究テーマとしての期待が高まりました。ただ、今回1つショックなことがありました。それは自分たちの距離感がまったく当てにならないことです。双眼鏡で見ていると、遠い尾根の上で帆翔しているように見えたタカたちは、実際レーダーで見ると、考えていた距離の3分の1しかない近い位置で帆翔していることがわかりました。土地勘がないことに加え、最近はおジロワシやオオワシなどを主に見ているから感覚が違うのかなあと言いつつはしてみたものの、調査での飛行経路のトレースがにわかに不安になってきました。

2. 札幌での小鳥の渡り調査

白樺峠を下山したレーダーの次なる行先は、札幌です。研究集会も行った北海道大学低温科学研究所の屋上で、11月中旬までの約2か月間、連日の観測を行なっています。事故さえなければ今も元気にまわっているはずですが、ここでは、低温科学研究所の藤吉研、熊本大学の三田研との共同調査で、鳥の渡り高度と風の関係について調査しています。大気は階層構造をもっていて、その層によって風の向きや強さが変わっています。昨年の予備調査では、追い風の強く吹いている層を鳥が選んで渡っていることが伺えましたし、この秋の鳥学会で発表した風探知レーダー「ウインドプロファイラ」に映る鳥エコーの解析では、向かい風が多い時期や場所では、渡り鳥は風の弱い日を選んで渡っていきそうなことがわかりました。渡り鳥は状況に応じて渡るかどうか、そしてどの高さで渡るかを判断しているようです。この秋の長期観測で、そのあたりのことを明らかにできたら、と期待しています。

レーダーは11月中旬からは、紋別と宗谷岬でワシの渡り時の飛行行動の調査をして、11月下旬には東京に帰ってくる予定です。秋の間中働きつづけたレーダー。メンテして休ませてあげねば。

レーダーの動画はこちらから見ることができます。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_rader.html

イベント情報

太平洋海鳥グループ年次大会のご案内

海鳥の研究と保全にかかわる研究者などが集まる太平洋海鳥グループの年次大会が函館で開催されます。会場は函館山や港も近い函館国際ホテルで、2月22～25日の日程で大会が開かれ、その前後に道東や下北半島へのツアーも予定されています。公開シンポジウム、シンポジウム、特別セッションのほか、通常の講演、ポスター発表など企画も盛りだくさん。海鳥の海上での行動研究の第一人者のR.Wilson博士、アホウドリ研究の長谷川博博士などの話も予定されています。国際的な集まりですので、海外の最新の研究成果などを目にする良い機会だと思います。

発表の申し込みは締め切られましたが、参加の申し込みは10月31日まで(第一次締め切り)大丈夫です。申し込みは英語のサイトから申し込み用紙をダウンロードして、それ

を事務局にメールするようになっていますが、日本語の案内のページもあります。申し込み等、詳しくは下記のサイトをご覧ください。「あまり時間がない」、「英語は苦手」という方も、22日は市民公開シンポジウムとなっており、公開シンポのみの参加であれば、事前申し込みや参加費は不要。英語の発表にも同時通訳がつく予定とのことなので、こちらに参加してみたい方はいかがでしょうか？

日本人向けの大会相談窓口(責任者:北海道大学 伊藤元裕 psg2008ito@yahoo.co.jp)が開設されていますので、ご質問ご相談等お気軽にご利用ください。

■Pacific Seabird Group Annual meeting 2009 のページ
[http://www.pacificseabirdgroup.org/index.php?f=meeting&t=Annual Meeting&s](http://www.pacificseabirdgroup.org/index.php?f=meeting&t=Annual+Meeting&s)

■太平洋海鳥グループの年次大会 日本語案内ページ
http://www.seabirdgroup.jp/PSG2009_Hakodate.html

ミュビシギ 英: Sanderling 学: *Crocethia alba*

1. 分類と形態

分類: チドリ目 シギ科

全長:	200-210mm	
翼長:	♂120-128mm	♀125-134mm
尾長:	♂46-52mm	♀48-54mm
露出嘴峰長:	♂21.7-27.5mm	♀23.5-27.8mm
ふ蹠長:	♂22.8-28.0mm	♀23.8-27.4mm
体重:	♂44-75g	♀50-67g

※計測値はCramp *et al.* (1983)による。

羽色:

繁殖羽では頭部、胸、背が赤褐色で黒い斑があり、腹部は白い。非繁殖羽では上面は灰白色で下面は白く、翼角が黒く見える(写真1)。多くの個体では第一趾(後趾)がない。幼鳥は、頭頂や体上面は黒～黒褐色で白色の斑があり、顔や胸は褐色味を帯びる。下面は白い。



写真1. ミュビシギ。

鳴き声:

チュツ、キュピツ、などと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

シベリアやグリーンランド、アラスカ北部、カナダ北部などの北極地方で繁殖し、その後南下して、南北アメリカ、アフリカ、西～南ヨーロッパ、東～東南アジア、マイクロネシア、オーストラリアなどで越冬する(Cramp *et al.* 1983, del Hoyo *et al.* 1996)。グリーンランドで繁殖する個体群とカナダ北部で繁殖する個体群は、形態や繁殖生態が若干異なり、標識調査によると越冬地も異なるという(Pienkowski & Green 1976)。現在、ミュビシギに亜種は知られていないが、今後、いくつかの亜種に分かれる可能性がある。日本で見られるミュビシギはシベリアやアラスカで繁殖する個体群である(Wetlands International 2006)。

生息環境:

繁殖期は北極地方の沿岸の植生がまばらの水はけのよいツンドラ地帯に生息し(del Hoyo *et al.* 1996)、非繁殖期は外洋に面した砂浜、河口、干潟に生息する。岩礁で採食することもある。内陸の湿地にはほとんど入らない。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
越冬期 繁殖期 渡り

一夫一妻。場合によっては一妻多夫。単独営巣。幼鳥は早成で離巢性(Pienkowski & Green 1976)。おそらく2年目から繁殖する(Cramp *et al.* 1983)。

巣:

開けた地表の小さな窪地に営巣する。しばしば葉やコケ類に覆われている。巣の大きさは、直径約8cm、深さ約6.5cm(Cramp *et al.* 1983, del Hoyo *et al.* 1996)。

卵:

一腹卵数は4卵で1回または2回繁殖する。卵の大きさは、約35mm×25mm、重さは約11g。卵色は、茶色～青緑色がかったオリーブ色で褐色の斑が散在。わずかに光沢がある(Cramp *et al.* 1983)。

抱卵, 育雛期間:

産卵は6月から7月中旬。抱卵期間は24～27日。抱卵は雌雄とも行う。育雛期間は約17日。少なくとも育雛期初期は雌雄ともヒナの世話をする(Cramp *et al.* 1983, Pienkowski & Green 1976)。

渡り:

成鳥は7月中旬から8月中旬に繁殖地を離れる。幼鳥は8月下旬から9月上旬に離れる。決まった越冬地に戻って来る。春の渡りは3月下旬から5月。大きな群れで渡る。シベリアで繁殖する個体はロシア東部を南下、インド洋や南西太平洋へ渡る。北米大陸の北部(グリーンランド含む)で繁殖する個体はアメリカ大陸を南下し、南米南端まで渡る。また、両繁殖地から、イギリス諸島を通り、ヨーロッパ南部や南アフリカへ渡るものもある。産まれて1年目の個体の多くは繁殖地に戻るが、越冬地に残ったままの個体もある(del Hoyo *et al.* 1996)。

4. 食性と採食行動

繁殖地では主に双翅類の幼虫や成虫を食べ、その他、植物の芽、根、種子、海藻も食べる。非繁殖期は、甲殻類やその卵、二枚貝、多毛類、魚、昆虫、漂着物(貝、魚、クラゲ)、腐肉、植物の種子などを食べる(Cramp *et al.* 1983, del Hoyo *et al.* 1996)。南アフリカの砂浜では二枚貝の水管(McLachlan *et al.* 1980)、カリフォルニアの砂浜では春と秋にはスナホリガニの一種、冬にはスナホリムシの一種(Maron & Myers 1985)、石川県では砂浜に優占しているナミノソコエビの一種を主に採食している(中川 1998)。

主に砂浜の波打ち際で群れで採食し、波が打ち寄せてくると走って陸側に波から逃げて、波が引くと波打ち際に来て採食する、という行動を繰り返す。夜間でも採食する。冬には採食縄張りを持つこともある(秋山 2000, Myers *et al.* 1979)。採食方法は主に2種類あり、くちばしを砂にさしこみ小刻みに動かす「さぐり」と、餌をみつけて直接つばむ「つつき」を行う。



写真2. 波打ち際に残ったミュビシギのさぐり採食跡。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 九十九里浜での分布と食性

ミュビシギは国内では主に秋から春まで砂浜海岸で見られる。千葉県九十九里浜は南北に約60km続く砂浜海岸であり、渡りの時期には約3000羽のミュビシギが渡来し、1000羽程度が越冬している(図1)。九十九里浜は国内最大のミュビシギの生息地と言える(奴賀ほか 2006)。しか

し、ミュビシギは九十九里浜に一樣に分布しているのではなく、分布には偏りが見られる。その理由を調べるため、筆者らはミュビシギの分布と餌量との関係について調べた。

九十九里浜を太平洋に流れ込む河川で9つの区域に区切り、ミュビシギの個体数、波打ち際の砂の中の底生動物の種類、個体数、湿重量、ミュビシギの糞の中に含まれる底生動物の未消化物を調べた。その結果、九十九里浜の波打ち際の砂の中では、二枚貝のフジノハナガイと甲殻類のシキシマフクロアミ、ヒメスナホリムシ(写真3)の3種が優占していた。ミュビシギの糞からも上記の3種が確認され(写真3, 右下), さらに昆虫類の残骸も確認された。ミュビシギはこれらの餌生物を主に採食していたが、フジノハナガイ以外の餌生物が減少する冬期には、フジノハナガイを主に採食するようになり、フジノハナガイの多い九十九里浜中央部に集まった(図2)。ミュビシギはフジノハナガイを丸ごと採食するのではなく、フジノハナガイが砂に潜る時に出す筋肉質な斧足の部分を直接ねらって採食し、その他の部分は捨てていた。フジノハナガイは、特に冬期のミュビシギの重要な餌となっていたことがわかった。九十九里浜ではフジノハナガイは砂の粒度が細かい場所に生息しており(図2), 砂の粒度が細かいとフジノハナガイが多く生息し、フジノハナガイを求めてミュビシギが集まる、という関係があることがわかった(Nuka *et al.* 2005)。

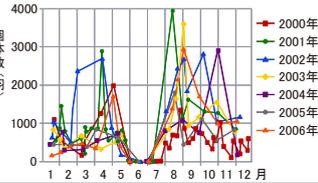


図1. 九十九里浜におけるミュビシギの個体数変動。三沢ほか(2005)と奴賀ほか(2006)にデータを追加して作図。個体数は概数。



写真3. 左上、フジノハナガイ(殻長約1cm)。右上、シキシマフクロアミ(体長約1cm)。左下、ヒメスナホリムシ(体長約1cm)。右下、ミュビシギの糞の中で確認されたシキシマフクロアミの残骸(胸肢と尾節)。

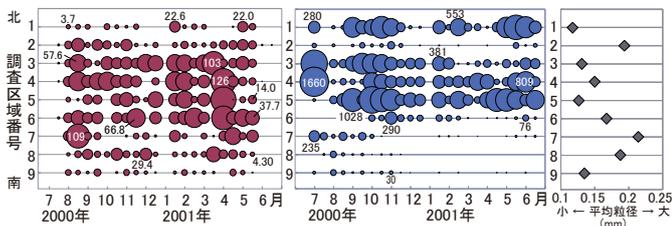


図2. ミュビシギの密度(左)とフジノハナガイの密度(中央), 九十九里浜の平均粒径(右)の関係。縦軸は九十九里浜の9区域。○の大きさはミュビシギ(羽/km)とフジノハナガイ(湿重量g/m2)の密度を示す(左図, 中央図)。目安として、図中にいくつかの密度の数値を示す。冬はミュビシギは区域1と区域3~6の中央部に多く、フジノハナガイは区域1, 3~5に多い。平均粒径は区域1, 3~5, 9が細かい。

● 推定個体数と保護上の課題

Wetlands International (2006)によると、アジア-オーストラリアフライウェイにおけるミュビシギの推定個体数は22,000羽と記されている。しかし、日本は越冬地として記されておらず、おそらく日本からのデータも不十分であると考えられる。九十九里浜だけでも毎年千羽程度越冬していることか

ら(図1参照), 推定個体数は22,000羽よりも多くなる可能性がある。多くのシギ・チドリ類が減少傾向にあると言われているが、ミュビシギについては世界的に見ても個体数は安定しており(del Hoyo *et al.* 1996), 減少の危機はないように思われる。しかし、九十九里浜では、砂の供給地である屏風ヶ浦や太東崎が護岸され、九十九里浜に供給される砂が減少しつつあり、ミュビシギの生息地である砂浜の規模が縮小してしまう事が心配されている。また、砂浜への車輛の乗り入れが、ミュビシギをはじめ砂浜で繁殖しているシロチドリやコアジサシなどの希少種への攪乱にもなっている。これらの種が安心して採食、休息、繁殖できる生息地を将来にわたって存続させていくことが必要だろう。

6. 引用・参考文献

秋山章男. 2000. シギ・チドリ類の採食行動(一宮川河口干潟周辺における調査). 海洋と生物128: 332-339.

Cramp, S. *et al.* 1983. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa: the Birds of the Western Palearctic, Volume 3: Waders to gulls. Oxford University Press, London, New York.

del Hoyo, J., Elliott, A. & Sargatal, J. 1996. Handbook of the Birds of the World, Volume 3: Hoatzin to Auks. Lynx Edicions, Barcelona.

Maron, J. L. & Myers, J. P. 1985. Seasonal changes in feeding success, activity patterns, and weights of nonbreeding sanderlings (*Calidris alba*). Auk. 102: 580-586.

McLachlan, A., Wooldridge, T., Schramm, M. & Kühn, M. 1980. Seasonal abundance, biomass and feeding of shore birds on sandy beaches in the Eastern Cape, South Africa. Ostrich 51: 44-52.

三沢博志・桑原和之・小川和子・奴賀俊光・綾富美子・泉宏子・箕輪義隆・本間征・高島斎二. 2005. 一宮川河口干潟およびその周辺の鳥類目録。我孫子市鳥の博物館調査研究報告13: 77-136.

Myers, J. P., Connors, P. G. & Pitelka, F. A. 1979. Territory size in wintering sanderlings: The effects of prey abundance and intruder density. Auk 96: 551-561.

中川律子. 1998. 河北海岸の鳥類相の研究-シギ・チドリ類の観察を通じた環境教育について-. 平成9年度 石川県教育センター指導者養成研修講座 研修報告書.

Nuka, T., Norman, C. P., Kuwabara, K. & Miyazaki, T. 2005. Feeding behavior and effect of prey availability on Sanderling *Calidris alba* distribution on Kujukuri beach. Ornithological Science 4: 139-146.

奴賀俊光・桑原和之・箕輪義隆・富谷健三. 2006. 新川から南白亀川までの九十九里浜の鳥類1998-2003年。我孫子市鳥の博物館調査研究報告14: 1-64.

Pienkowski, M. W. & Green, G. H. 1976. Breeding biology of sanderlings in north-east Greenland. British Birds 69: 165-177.

Wetlands International. 2006. Waterbird Population Estimates - Fourth Edition. Wetlands International, Wageningen, The Netherlands.

執筆者

奴賀俊光 千葉市野鳥の会

学生時代は毎週のように調査で長〜い九十九里浜を行ったり来たりしていましたが、大学を離れた最近では年に数回程度しか行く事ができなくなっていました。日本



水田でシギチを観察中。

ではシギ・チドリ類の研究例や砂浜海岸での研究例は少ないため、自分の調査・研究が役に立っているのではないかと思います。現在でも細々と調査・研究を続けています。

活動報告

研究集会 in 北海道 の開催報告

10月11日に北海道大学低温科学研究所において研究集会を行いました。参加者は約50名、広い会場でしたが、ほどよく席が埋まりました。講演の内容やエクスカージョンの様子をご報告します。



写真1. 開会のあいさつに立つ植田。

● 渡り鳥と気象

「渡り鳥と気象」というテーマで、まず気象学の見地から低温科学研究所の藤吉康志先生に講演していただき、続いてバードリサーチの高木と植田から発表しました。藤吉先生からは、気象観測の際にノイズとして除かれていた鳥の観測データを逆手にとって鳥の渡りを観測しようという取り組みや、レーダーなどの気象観測機器の発達とともに、いままで観測することができなかった大気の流れや空間構造がわかってきたこと、これが鳥の渡りの理解に役立てるのではないかといったお話を実際に観測した大気の流れを視覚化した映像をまじえて紹介していただきました。

バードリサーチの高木からは、ミヤマガラスが海上を横断する渡り行動が、降雨がなく風がない日の翌日になることや、繁殖地が年平均気温0℃前後の位置にあることなど気候や気温が鳥の生態に深くかかわっていると考えられる調査結果の発表がありました。植田からは気温や積雪の影響について、越冬期のハクチョウやカモ類の生息条件を左右しているばかりでなく、近年の気温の上昇とともに夏鳥の繁殖や渡来が早まることによるエサの豊富な時期とのズレが生じたり、捕食者の活動が早まったりすることの繁殖へ及ぼす影響について、多くの事例をまじえて紹介しました。



写真2. 休憩時間に談笑する参加者。

● 一般講演と観測機器見学

一般講演ではバードリサーチ会員の調査報告がおこなわれ、伴野俊夫さんは室蘭を通過する数万羽のヒヨドリの渡りのルートについて調査されていました。海上を渡るものと陸沿いに進むものがあり、どのような条件でルートを選択するのか興味深いお話でした。ヒヨドリが渡っている様子を

船上のビデオから撮影した映像も紹介され、大きなかたまりになったヒヨドリの群れがうねるように移動している様子が紹介されました。小平大輔さんは北海道大学の学生で、都市部に営巣するようになったオオセグロカモメについて調査をされていました。ビルの屋上に営巣し都市に流れる河川の川魚やゴミを採食しているとのことでした。さらに人間社会との軋轢についても研究を進めるとのこと、招いているのは人間ですが増えすぎて嫌うのも人間なので、今後の動向とともに興味深い研究でした。

ほかにバードリサーチから、室蘭の猛禽類の渡りパターン(黒沢ら)、北海道のカワウの分布(加藤)、モニタリングサイト1000のガンカモ調査について(神山)の活動報告を行いました。会場からは積極的に質問や意見も多く出されていました。引き続き行われた見学会では、低温科学研究所の屋上にあるドップラーソナー、レーダーなど気象観測装置を見ていただきました。



写真3. 観測機器が設置してある屋上のプレハブ前で。

● エクスカージョン

エクスカージョンは、翌12日から1泊2日の行程で室蘭へ向かいました。12日はウトナイ湖などを訪問しながら室蘭市の地球岬をめざし、なんとか絶景とウワサの夕陽を見ることができました。翌日早朝は、メインである地球岬周辺での小鳥の渡りを観察しました。夜明けとともに小鳥が群れになって飛びかかっていましたが、海からの強い向かい風で、なかなか海には出られずに、陸の樹林に沿うように小鳥たちは飛んでいました。無数の小鳥は圧巻なのですが、薄暗く、飛び去っていく小鳥の同定は難しく、なおかつ数が多いため、この小鳥の渡りを捉え調査することを考えると工夫がかなり必要だと感じました。将来レーダーなどの観測機器が道を開いてくれることに期待したいです。行き当たりばったりのエクスカージョンになり反省しています。ただ、鳥好きの方たちと楽しく観察や情報交換ができ、室蘭名物の焼きとりを調査できたのは有意義でした。

ご参加の皆様、ありがとうございました。またお会いしましょう。

【守屋年史】



写真4. 地球岬で記念撮影。

バードリサーチニュース 2008年10月号 Vol.5 No.10

2008年10月18日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎